仙台教区報

発行所　カトリック仙台教区事務所
980仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二-二二-七三七一番
編集・発行人　三浦　平三

「カテドラル建設」司牧評の議題に
実現への具体的第一歩を目指す…

司牧評に提案の意味

きたる9月23日の教区司牧評議会に、「カテドラル建設資金募集運動開始の件」が提案されている。提案の趣旨は、資金調達がカテドラル建設実現のカギであるとし、そのためカテドラル建設趣旨を全教区に浸透させながら、具体的に資金調達の方法を審議しようというもの。

カテドラル建設問題はこれまでいろいろいわれているが、もうひとつ焦点が絞り切れずにいて、具体的一歩が進めない状況にあったといっていい。その意味ではこれを機会に、全教区にクローズ・アップされるだろう。

カテドラル建設問題とは

仙台教区のカテドラル（司教座聖堂）元寺小路教会の聖堂は、すでに耐用年数を越え、10年ぐらいで新築する必要ができた。同時に教会の敷地内にある教区事務所などの建物を整備して、カトリックセンターの機能を充実させる構想も生まれている。資金調達は自力しかない。これらは全教区の立場から取り扱うべきものだが、聖堂改築は元寺小路小教区の直接にかかわる問題でもある。

以上の建設計画をどう決めるか、資金の調達をどうするか、というのがカテドラル建設問題で、今はまだ具体的決定がない。

趣旨の理解と協力

どのような計画が決まるにせよ、どのような資金集めになるにせよ、10年後にカテドラルが改築されるためには、仙台教区の全信者が心を合わせて一体となることがなんとしても必要である。元寺小路小教区の信者が、自分たちの聖堂改築のために、十分な責任を分担することは当然だが、カテドラルである以上、教区全体の協力もまた当然であろう。

協力の第一歩は建設趣旨の理解である。いずれそうした趣旨書が準備されて、全信者に配布されることになろうが、善意をもって積極的に理解しなければならない。意見の食い違いが全体の計画進行の妨げとならないように、良識の気くばりが必要だろう。そこから協力が生まれるのである。信者数がやっと一万人を越えるぐらいの教区にとって、その力を二倍にも三倍にもするのは、お互いによく理解して力を合わせる以外にはない。一人ひとりの信仰の力、それを合わせた大きな力、それが不可能を可能にするのである。

いまだけの問題でない

中世のヨーロッパでは、カテドラル建設に百年以上を費している。今はそういかない面もあるが、建物は私たちの短い一生を越えて存在しつづけることも知っておく必要がある。つまりカテドラル建設で私たちは、先人たちと後代の人びとに大きな責任をもったということ。これも大事な認識であろう。

司教日程（9月15日現在）

10月3日　教区司祭団役員会（仙台）
8日　ドミニコ学院創立三十周年記念
11～13日　三教区合同司祭研修会（福島）
14日　常任司教委員会出席（中央協議会）
16日　塩釜教会三十一周年記念
17日　グアダルペ会月例会出席（須賀川）
20～21日　カリタス・ジャパン理事会
21日　司教協・財務委員会（中央協議会）
24～25日　宗教法人東北ブロック研修会（仙台）
11月3日　石巻カトリック幼稚園落成式
6日　築館教会堅信式
7日　ケベック会月例会出席（青森）

教区の霊的向上に新戦力
クレメント神父を招へい

かねて教区内における霊的生活の向上が課題になり、霊的指導者をのぞむ声が強かったが、このたび御受難修道会のクレメント・ペインター神父を仙台教区に招くことがきまった。同神父は当初は2年契約で教区で働き、教区、地区、小教区教会や修道会、カトリック諸施設などの黙想会、練成会、研修会などの指導にあたる。

御受難修道会は一七四二年、十字架の聖パウロがイタリアで創設、主の御受難の信心を広めるため、説教や黙想指導を使命とする。日本では東京にみことばの家、宝塚と福岡に黙想の家を持っている。2年ほど前から同会の国井健宏神父（日本管区長）が、黙想会の黙想指導を元寺小路教会で行っており好評である。クレメント神父は10月はじめに来仙、居住は元寺小路教会が予定されている。

教区では各地区や小教区教会、修道会に、クレメント神父による黙想指導の企画をもつよう望んでいる。

来年の叙階式は四ツ家（3月20日）、大湊（4月30日）で挙行予定

来年は2人の司祭叙階が予定されているが、このほど場所、日時が決まった。

板垣　勤　司祭叙階式
昭和59年3月20日（春分の日）、盛岡四ツ家教会において。

川村英成　司祭叙階式
昭和59年4月30日（天皇誕生日代休）大湊教会において。

なお佐藤修神学生の助祭叙階は、3月20日四ツ家教会であわせて行う。

白熱した仙塩合同運動会
今年は八木山教会が優勝

仙塩8教会による恒例の合同運動会（主催仙塩地区カトリック教会合同会議）は、今年も各教会から約三百五十人が参加して、9月18日東仙台ラ・サール会グランドで行われた。午前9時からの野外ミサは佐藤千敬司教が司式、午前10時の開会式に引き続いて競技に移った。トップの中・高生男女の障害物レースから最終の騎馬戦まで11種目、教会対抗の得点争いだけに司祭や修道女まで加わり、秋空のもと白熱したレースが展開された。とくに呼びものの対抗リレーではいっそう力が入り、光ケ丘は時ならぬ大歓声につつまれた。最終の結果は1位八木山教会、2位東仙台教会、3位を西仙台教会と塩釜教会が分けた。晴れの優勝杯は佐々木正吾会長から八木山教会に授与され、午後3時半終了した。

この運動会は仙塩地区教会の親睦を目的に毎年行われ、今回は連合婦人会の弁当販売、東仙台教会婦人会の豚汁サービスなどもあって、秋の一日たのしい交歓の催しとなった。学園文化祭や幼稚園運動会など重なる多忙な時期だが、大会委員会はもっと多くの信者が参加するようのぞんでいる。

駐日教皇大使に
カナダ人のカルー大司教

駐日教皇庁大使にウイリアム・アクイン・カルー大司教が任命された。さる6月にマリオ・ピオ・ガスパリ大司教が急逝されて、教皇大使は空席になっていた。新任の大使はカナダ生まれの60歳。一九四七年司祭叙階、オタワ大学に学んで哲学、神学、教会法博士。五三年バチカン入り、七〇年駐ルワンダ、ブルンジ両共和国大使、七四年よりキプロス共和国大使兼エルサレム、パレスチナの教皇使節として困難の中東で活躍、今日に至った。

〝実践の手引㈡〟を配布

三年間の教区司牧目標の第2年、ことしの実践目標は「小教区教会にキリストの平和を」。教区司牧評議会では昨年と同様に、〝実践の手引き㈡〟を作成、教区の全小教区教会に配布した。

いうまでもなく、司牧目標は各人、各教会がそれぞれ工夫して、祈りのうちに自分の身につけるもの。〝実践の手引き〟はそれを手助けして、具体的なヒントを与える。とりわけ今年は小教区教会というきわめて身近の問題であるため、各教会では個人はもとより、信徒会、婦人会、青年会などの話し合いに、この手引き書が活用されるようのぞまれている。

第三世界への医療援助を討議

カトリック医師会仙台支部総会

日本カトリック医師会仙台支部（早坂養吉支部長）の総会が、佐藤千敬司教も出席してさる8月20日、21日の両日、福島県飯坂のあずま荘で開催された。

仙台支部は福島、宮城、岩手、青森4県の信徒医師・歯科医師の集まりだが、今回は中央から日本カトリック医師会阿武保郎会長、草川三治事務局長、華表宏有理事も加えて約30人が参加した。

総会は始めにカリタス・ジャパン理事長松村菅和神父、桜の聖母短大佐々木信夫教授の講演が行われた。その後会議に移り、医師会として行うべき第三世界に対する医療援助の方向と、その実現のためのエネルギーについて熱心な討議が行われた。また医学生、歯科医学生の名簿の正確な把握や、その集まりの積極的推進に努力すること、さらにカトリックアクションの問題意識を高めるべきであるということで意見の一致を見た。

信仰刷新の決意あらたに

教区特別聖年長崎巡礼終る

仙台教区の特別聖年行事として企画された「オラショ長崎・平戸・津和野に祈る」巡礼は、8月14日から18日までの4泊5日間、教区各地から34人が参加して行われた。

今回の巡礼は同じコースの全国から集まった巡礼団と合同であったので、総勢70人以上バス2台をつらねる大巡礼団になった。台風襲来もうまい具合にかわして、前半は酷暑だったが後半は暑さも和らぎ、年配者が多かったにもかかわらず無事に終了できた。

長崎、平戸では聖母の騎士修道会の小崎登明修道士が案内してくれたため、14日には聖コルベの最初の祝日を聖人ゆかりの本河内の修道院で、里脇浅次郎枢機卿司式の記念ミサに与ることができた。そのほか長崎市内の浦上、大浦天主堂はもちろん、通常の巡礼ではあまり行かない、神の島、黒崎、紐差、田平などの教会を訪れ、殉教者の信仰の一端にふれる思いがした。とくに信徒が力を合せて自分たちの教会を支えている信仰のつよさに感じさせられた。巡礼はさらに足をのばし、山口ザベリオ教会、津和野の乙女峠マリア聖堂を訪れ、信仰刷新の決意と恵みを祈った。

おしらせ ▽…

仙台・教会学校リーダー研修会

日時　11月2日(火)午後6時30分～
　　11月3日(水)午後4時
場所　宮城町芋沢字青野木
　　聖ドミニコ女子修道会宮城町生活寮
指導　岩橋淳一神父（東京教区司祭）
会費　一教会　五〇〇〇円
　　一人　一〇〇〇円
宿泊費
現在リーダーの方、または教会学校に関心のある方はどなたでも参加できます。詳しくは各教会の主任司祭、教会学校のリーダーまたは左記におたずね下さい。

聖ウルスラ会木ノ下修道院　シスター小川
電〇二二二－57－〇三三九

女性のための黙想会

待降節の準備のため、そして神さまの呼びかけに耳をかたむけ、静かに祈りのときをもつために、どうぞ一日の黙想会にご参加下さいませんか。

日時　11月13日(日)午前10時より午後4時
場所　聖ウルスラ会木ノ下修道院
テーマ「神の呼びかけを聞く」
対象　高校生以上の女性（信者、未信者を問いません。）
申込先　聖ウルスラ修道会木ノ下修道院
　　シスター島田恵美子
　　電話〇二二二－57－〇三三九

第16回「新世界」黙想会

主題　聖書で祈る
指導　沢田和夫神父（東京教区司祭）
日時　11月19日(土)夜より20日(日)午後
会場　宮城町芋沢字青野木
　　聖ドミニコ女子修道会宮城町生活寮
会費　一般　五〇〇〇円
　　小学生～大学生　四五〇〇円
人数　20人（定員になり次第締切ります）
主催　仙台市連坊2－12－6渡辺清方
　　思草庵
　　電話〇二二二－91－三五七九

教会財政を知ろう ②……カテドラティクムについて……

先月の本欄で、小教区教会の維持管理および諸活動は、信徒が納入する教会維持費でまかなわれるということを話した。このほか教区が設置母体となっている老人ホーム、保育所、幼稚園はそれぞれ独立した会計をもっている。（いうまでもないことだが、各修道会および関連する学校、施設などは別法人で、教区とは会計面で全く別存在である）

ところで教区には小教区教会とは別の存在がある。司教館、教区事務所といったものは小教区でないから所属の信徒はいない。ではその費用（司教や教会を持たない司祭の生活費、司教館や教区事務所などの維持管理費、教区事務費、全教区的な活動費など）はどうやってまかなわれるのだろうか。

そのためにカテドラティクムという制度がある。つまり各小教区教会が、それぞれの教会の収入規模に応じて、その何パーセントかを（仙台教区では8パーセント）教区本部に上納する仕組みである。各教会の信徒は、教会維持費を納入することによって、自分の教会だけではなく、仙台教区全体のために分担しているのである。

小教区をこえた教区全体の活動の活発化がのぞまれる時代である。その活動は財源の多少によって左右される面がかなり多い。教会維持費の重要さを、その面から理解しよう。

知っていますか？ 〃仙台教区一粒会〃

一粒会。どこかで聞いたことがある、という人は多いはず。だいぶ昔からある教区の組織で、司祭召命を促進するために、仙台教区の神学生とその志願者に物心両面の後援をする会であって、具体的には一定の祈りと献金を行う会員を募集して目的を達成する。

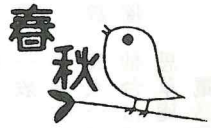
あまり表面的な活動の華々しさは見えないが、現在も教区神学生すべての全養成費用はこの一粒会がまかなっている。教区にとってはきわめて大きな存在。この組織が、教区各地区から選出された信徒の委員によって運営されていることは、その特徴の一つであろう。

日本のほとんどの教区に同じ名称の一粒会があるが、活動はそれぞれ違っており、ある教区では一粒会組織が司祭召命運動に、きわめて積極的な役割を果しているようだ。

仙台教区もこの一粒会の組織をもっと認識し、活用したらどうだろうか。

一粒会の組織はいまでも生きていて、多くの小教区教会にはその責任者が任命されているはず。もし分からないなら、主任司祭に一粒会の会員になることを申し出ること。そして一粒会員として、一定の祈りと献金をして、司祭召命に積極的に働こう。　会員がふえることで、会の目的がより達成され、私たちは司祭召命促進に働くことができるのである。活動も多様にわたってゆくことになろう。

春秋



9月15日は敬老の日。口の悪い人が、日本では一年三百六十五日のうち、一日だけ老人を敬うの、といっていた。

敬老の日とか母の日などは、いつからできたのだろうか。昔人間の者にはどうもピンとこない。特別そんな日を設けなくても、母は感謝されるもの、年よりは敬われるものであったような気がする。

人間誰だって黙っていても年は取るのだから、なにも特別に扱うことはない、という人もいよう。しかし70年、80年の長い生涯を過した人は、ただそれだけで敬われるべきではないだろうか。業績をあげるあげないにかかわらず、誰もが容易でない歳月を生きたのだから。

若ければ意気さかんで力もみなぎり、なんでも出来ないことはない、という自信に溢れる。でもその力の限界を知らされる老いはかなり早く訪れるものである。

敬老の日のラジオで、子どもたちが無邪気に、老人にはなりたくない、といっていた。正直な子どもの目には、老人の衰えはいまわしいものと映るのだろう。でも、福音的な目で見るなら、老いの衰えさえも、神から与えられた生涯を力一杯生き抜いた尊い姿そのものなのである。（M）

特別聖年巡礼の旅

津和野　乙女峠

平教会・工藤五郎

今回の長崎巡礼は私ども老人にとって、少少きつい日程と思いました。14日、15日は酷暑で老妻などはすっかり参っていました。16日は曇り、17日は台風の影響で暑さは和らぎました。それでも一人の落後者もなく、長崎や平戸の巡礼を終え、最後の巡礼地津和野に着いた夕方は小雨が降っていました。

夕食のとき津和野の神父様が見え、乙女峠の殉教について話してくれました。明日雨で全員が乙女峠にゆくのは無理かも知れない、と考えて下さったのです。神父様独特の口調で語る祐次郎や五歳のモリちゃんの殉教に、みんなは深く感動してしまいました。

翌朝、津和野教会でミサに与りました。教会のあたりはもとの家老屋敷とか、昔ながらの武家屋敷が並び、道のわきにはきれいな水が流れる堀割がつづき、大小とりどりの鯉が泳いでいるさまは見事でした。この平穏な美しい町で、昔おそろしいキリシタン弾圧があったなどとはとても思えませんでした。

二つの峰が険しくせまる谷川に沿って乙女峠に向かう。曲りくねった坂は岩肌が露出していて、雨に濡れて滑りそうになる足許を注意して登る。この山道を浦上の信者たちは後ろ手にしばられ、むち打たれながら追い立てられて登ったと思うと辛くなってきました。ふもとからどれくらい歩いたでしょうか。突然視界が開けて明るくなる。見上げると美しい塔と十字架のマリア聖堂です。ここは三尺ろうや土ろうなど、あらゆる拷問で多くの殉教者が出た光淋寺廃寺址に建てられたとききました。聖堂は外見に似ずせまく、六畳ぐらいの広さで十数人しか入りません。大半の人は聖堂の外で、傘をさしながらお祈りをしました。聖堂から山すそに沿って28殉教者記念碑が建っています。五歳の幼児から子どもを含めて聖母を中心に、お祈りをしている殉教者の碑を見上げて、当時をしのびました。

乙女峠とは昔から呼ばれている名前だとききました。しかし殉教した安太郎や祐次郎少年が死期のせまってきた時、マリア様に似た美しい婦人が毎晩姿をあらわし、やさしい声で話しかけ、彼らは慰められて天国に召されたという事実は、ほんとうに乙女峠の名にふさわしいな、と思って峠を下りてきました。

大湊での家庭訪問宣教

聖パウロ女子修道会

大湊教会の横島健二神父様から声をかけられて、八年ぶりにむつ市の家庭訪問宣教をおこなった。7月25日から8月いっぱい、限られた40日間だったが多くの人びとに出会い、み言葉の種子をまくことができた。

むつ市は大湊と田名部（たなぶ）の町に分かれ、人口約五万人、千八百世帯でそれほど大きくない。教会は大湊にあり田名部には布教所、両方にカトリック幼稚園がある。この二つの町はとても対照的だ。

大湊はカトリック幼稚園の評判はとてもよく、町の人はほとんど知っている。そのため訪問宣教は好意的に迎えられ、教会に関心をもつ人も多かった。田名部は、「ものみの塔」や「エンマヌエル派」といった狂信グループの訪問が多いらしく、私たちもその一派と思われたりして、かなり難しい所のような印象を受けた。

「全世界に行きすべての人に福音をのべつたえなさい」といわれた師イエズス。私たちはこのみ言葉どおり、ミサの中に一日を奉献し、一軒一軒訪れてみ言葉の種子をまいた。教会を紹介しながら、良書（福音）の普及に全力を尽くすのである。ことわられることもあるが、思わずジーンと来る好意で迎えられることもある。そうしたエピソードはたくさんあるが、思いがけず八年前にまいた種子が実を結んでいるのを知り、毎日の訪問に一段と熱がこもった。教会に関心を示す人たちに大湊教会を紹介しながら、どれほど多くの人が真理、正義、愛をもとめているかを知らされる。そして、「刈り入れの主に、働く人を送って下さるよう祈りなさい」といわれたみ言葉が思い出された。

大湊教会の信者さんたちとの分かち合い、そして、ひとりも滅びることなく救われることをのぞむ横島神父様の宣教の熱意、それらは私たちの訪問宣教の励ましになり、新たな宣教に駆り立てる力ともなった。宣教には仙台、東京から8人の姉妹が参加した。

おらが教会

(36)

福島・原町教会

相馬野馬追祭で知られる福島県原町市は、太平洋と阿武隈山脈のあいだにひろがる人口四万七千五百人の、農業を中心に商工業で栄えた町です。比較的温暖な気候に恵まれ、たいへん生活しやすいところです。

この地に初めてキリストの福音がもたらされたのは、昭和25年にドミニコ会の故ヴィエット神父様によってでした。翌年1月には、教区長浦川和三郎司教様を迎えて献堂式が行われました。そして4月にヤシント・エベール神父様が赴任してこられ、今日まで三十二年の歳月がたちました。当時は人家もまばらな草っ原で、千五百坪もある教会敷地の整備には神父様も寝る間を惜しんで働かれました。そして伝道婦の関先生、賄いの後藤さんがそれをささえていました。教会の庭を青年たちに開放し、テニスを楽しむ者、英会話を習う者で教会はいつも活気に満ちていました。夕の祈りには沢山の青年たちと一緒に祈ったことなど、神父様は当時のことを懐かしく思い出されるそうです。

昭和28年、町の要請で幼稚園が併設され、人格形成の土台となる幼児教育にも力をそそいできました。三十年たった現在、もう二代目の子どもたちが通園しています。そして幼い日に神様に手を合せることを学んだ卒園生が、クリスマスには子どもたちと連れ立って沢山集まってきます。

当時の青年たちが洗礼を受け、やがて結婚してその子どもたちも受洗、そんな家族ぐるみの信者もふえてきました。そんななかで最も大きな恵みは佐々木博神父様の誕生です。こんなに小さい、歴史も浅い教会から司祭が生まれたことは、私たちの大きな誇りです。

昭和40年代は教会の最盛期だったように思います。日曜学校をはじめ、信徒会活動が活発に行われました。しかし、その後の教会の新しい動きに戸惑いを感じながら、思うような活動のないまま現在に至っています。昨年来、神父様が病気がちになり入退院をくりかえしています。原町教会には大きな試練のときです。長い間私どもは神父様から、ミサの後にお茶やお菓子をいただいてきました。とてもやさしい方です。これからはただ与えられるだけではなく、与える信者に成長しようとめざめはじめました。

いま小さな動きが始まりました。信者の募金で、三十二年ぶりに教会の畳替えをしました。第一日曜のミサ後には、「みことばのわかち合い」の集いをもち、お互いの信仰体験を話し合っています。まだ未熟な信仰ですが、心を開き合うことこそすべての活動の土台であると、頑張っています。これからの予定としては10月の幼稚園バザーに教会のコーナーを設け、信者の力を合せて活動する教会に生まれ変りたいと願っています。

教会のまわりには神父様が植えられた、ヒマラヤ杉や園庭の藤が、三十年の歴史を語るように太く大きく成長しています。そして幼稚園の子どもたちばかりでなく、町の人びとにも安らぎを与えています。

エベール神父様の徹底した清貧の生活と、ご自分をへりくだる態度は私たち信者に無言の教えです。私たちは原町教会の初代信者にえらばれた責任と、その恵みの深さをあらためて思い直し、キリストの教会を愛する共同体に成長してゆきたいと願っています。最後に神父様の一日も早い全快を祈りながら、私たちの教会の紹介を終ります。

（相良　ヒロ子）

【編集後記】

きびしい残暑がつづいたが、いまはもうすっかり爽やかな秋。それにしても大韓航空機のミサイル撃墜はショック。人類の平和は夢みたいなものだろうか。いやいや、そんな気持に負けず、平和の福音を一歩一歩すすめてゆくのが信者の道だろう。

司牧評でカテドラル問題を取り上げた。積極的な発展を見せるよう祈りたい。教区の聖年巡礼で長崎をまわり、たくさんの聖堂を見てきた。その一つ一つに信徒のつよい信仰と協力が刻み込まれているのを知り、さすがキリシタンの血と感じいったが……。私たちもそれだけの信仰は持ちたいと思う。（M）